



## シミュレーションで増す確率

「リンダは31歳、独身で、意見を率直に言い、また非常に聡明です。彼女は哲学を専攻していました。学生時代、彼女は差別や社会正義の問題に深く関心を持ち、反核デモにも参加していました。彼女についてもっともありそうな選択肢をチェックしてください。

ア) リンダは銀行の出納係である。

イ) リンダは銀行の出納係であり、フェミニスト運動の活動家である。」

これは、2002年のノーベル経済学賞を受賞したダニエル・カーネマン教授が出した「リンダ問題」という心理学の問題である。

カーネマン教授による調査の結果、統計学の知識の有無に関わらず、多くの人は「イ) リンダは銀行の出納係であり、フェミニスト運動の活動家である」をチェックしてい

た。しかし、「銀行の出納係」かつ「フェミニスト運動の活動家」の確率は、単なる「銀行の出納係」の確率を超えることはあり得ない。多くの回答者はリンダの学生時代の情報に惑わされて、より詳細な記述を選んでしまったのだ。

この事象は、人間の無意識な「経験則」がより詳細な情報を勘違いして、論理的な確率と乖離して意思決定してしまう場合があることを示唆している。差別の問題に関心を持ち、デモに参加していたの

が、フェミニスト運動の活動家の代表的事例として印象付けられた脳は、リンダがフェミニスト運動の活動家である確率を過大評価した。

同じように、リスクな事象をリアルにシミュレーションすると、その発生確率を高めを感じる傾向もあるようだ。「〇〇さんと同じ属性の人は、40歳になると100人に1人がガン患者になる」というデータがある。もしガンになったら、医療費の出費がこのように増え、働きにも支障が出てき

て収入がこのように減る。住宅ローンの返済にはこの位の不足が生じて、・・・」と詳細にシミュレーションされたら、なんだかリスクが高くと感じて、つい保険に入る気になることはないか。

リスク管理にストレステストを用いる場面は多い。ただ、いわゆるストレスシナリオは、複数のリスクファ

クターについて各々の発生確率が低い危機的状況を同時合成する場合がある。ストレスシナリオのシミュレーションから湧いたパニック感に論理的な確率をぶつけ、客観的リスク・コミュニケーションができるように気をつける必要があるかもしれない。

逆に宝くじを買う時は当たったらどうなるか詳細にシミュレーションするのが良いだろう。ただし幸せ感が大きく膨らんで買いすぎてしまうかも・・・

(朱 映奇)

